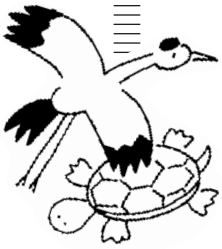
公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

2021年（令和3年）1月5日
第692号

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館



＜アンケート特集＞

2020年に印象に残った本

公民館図書室利用者・講座参加者の方に、
「今年印象に残った本」アンケートに答えていただきました。
皆さんのおすすめの本をご紹介します。

『これからの男の子たちへ』

太田啓子（大月書店）

山岸　佳子

子育てが始まると、母は「当たり前」だが、父だと「大絶賛の嵐」なことがあり、不思議でした。ジェンダーという言葉に出会い、得心したものの、その感覚はマイノリティなので夫には理解をえられず、モヤモヤが積もる。本書ではその言語化、および、行動の指針が書いてある。2人の幼い息子を持つ自分には、新たな目標が加わった。そして「これからの男の子たち」は本書を読んでどう感じるのか知りたい。

『僕のつくった怪物』

乙一（集英社）

原田　壮

圧倒的な独創性とそれによって支えられる世界観。本作を形容するには、この一文だけで足りるほど、彼が創り上げる世界は美しい。年端もいかない二人の少年が異世界で「怪物」と対峙するという少々ありふれた設定ではあるが、乙一さんの独創性が随所にちりばめられ、その世界を唯一無二なものへと昇華させている。私達も無意識のうちに「怪物」を生み出しているのではないか？そう思わせるほど彼の世界観は求心的だ。

『羊と鋼の森』

宮下奈都（文藝春秋）

初鹿　勇成

この本のタイトルから、どんな物語か想像できるでしょうか。主人公が、新米ピアノ調律師として、日々葛藤する姿が描かれています。ピアノの演奏には、ピアノ本体の状態を維持することが欠かせません。さらに、奏者がどんな音を奏でたいのかを聴き、出来る限り要望に応える。自分が目指す「理想の音」とはなんなのか、何が正解なのかと調律師として苦難する姿に心揺さぶられることでしょう。

①『時の旅人』

アリソン・アトリー・松野正子訳（岩波少年文庫）

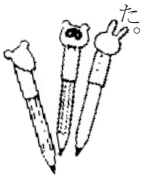
②『寝るまえ5分の外国語』

黒田龍之助（白水社）

森島　麻衣子

①20世紀前半のロンドンに住む少女ペネロピーが16世紀のダービーシャーとの間を行き来する時空を越えた冒険物語。風景のみならず16世紀の生活道具や暮らしの色、匂い、音そして花や木や草のいきいきとした描写がすばらしい。眠っていた五感を目覚めさせてくれた一冊。

②スラヴ語学の研究者による、語学書の書評集（計100本）。苦痛の語学ではなく文学と同じように感動でき、目の前に新しい世界を見せてくれる語学書たちを愛をこめて紹介している。コロナで当面は旅にも出られないだろうが、それでもなお何か新たな、コトバを勉強してみたくなった。



『鎌倉のおばさん』

村松友視（新潮社）

向井 誠一

詐話症、英語でMendacityと云う。この種の病は洋の東西を問わぬらしい。村松梢風は女遍歴の激しい人であった。名声定まる頃彼は鎌倉に邸宅を構えた。伴に住んだのは書名の由来となる愛人であった。一方著者は本妻の孫にあたるが、何故か彼女との交流を絶やしてはいなかった。だがそこで聞かされるのはすさまじいというべき身の上話であった。オックスフォード大数学科修了后都内有名予備校講師をしていた等々。当然筆者に？が灯るが、悪びれぬ物云いに肯づいてもしまう。だがそれらが真赤な嘘であることのわかる日が来る。彼女が亡くなって后通夜の席での身内との語らいによる。当然著者も何が彼女をそこ迄駆り立てたかを考える。しかし最后は読者に任せるといった風である。

中には心にホッとするものを覚える人もおられるのではないか。

『献灯使』

多和田葉子（講談社文庫）

三好 洋子

時代は近未来、日本は鎖国下にあり、東京では土壌汚染が進んでいる。燃料不足で車も電車も走っていない。老人は矍鑠（かくしゃく）としているが子供達は皆微熱があり歩行困難だ。主人公「無名」は子供代表として国際的研究所で医療を受ける事となる。果たして彼は日本の未来に光明を灯す「献灯使」となり得るのか。放射能汚染で文明が後退した未来を描き警鐘を鳴らすのは国立出身の女性作家です。恐くて考えさせられる物語でした。

『「高齢ニッポン」をどう捉えるか』

浜田陽太郎（勁草書房）

宮武 光吉

取材される側に身を置き、その結果に一喜一憂していた者として興味深く読めた。そして、取材する側が、どのように考えて行動しているかを、伺い知ることができた。筆者は、一橋大学法学部卒、現在は朝日新聞社編集委員であり、社会福祉士。

首相官邸取材の経験から、社会保障の制度・政策が「権力闘争の材料」の一つとして扱われていることなど、その裏側が書かれていて、とても参考になると共に、少し疑問も覚えた。

『全体主義の克服』（集英社新書）
『新実存主義』（岩波新書）

マルクス・ガヴリエル
中島隆博

唐木 紀介

現代の全体主義をとり上げ、克服する新哲学を示す。

マルクス・ガヴリエルは新実在論で、中島は東洋哲学の「礼」と弱い規範の複合論で克服。

欲望の自由資本主義とそれから生れる権力としての全体主義を人間主義へと変容する方法を提起します。倫理的消費や倫理的世界を求め豊かな自然をとりもどす実践を求めます。

新観念哲学の理念と異論を排除しない多様な存在を認め、連帯と希望を求めています。

『ペスト』

ダニエル・デフォー作
平井正穂訳（中央公論文庫）

大井 利雄

未だ衰えぬ新型コロナ。たくさんの本がだされた。紹介する本以外にも『コロナ後の世界を生きる』（岩波）村上陽一郎、『コロナ後の世界』（文春）大野和基編、『人類と病』（中公）詫摩佳代等多くの好著がある。カミュの『ペスト』は不条理な世界の生死について哲学的考察をにじませながら惨事を描いた。本書は一六六五年ロンドンで猛威をふるったペスト流行時の市民や行政当局の動きなど、可能な限りの資料を駆使して当時の状況を記述した。迫ってくる恐怖におびえ、逃げ惑い、受け入れを拒否し、街を閉鎖する姿は三百五十年へた現在でも変わらない心情である。著者の凄さは、感染経路や病状、パニックに陥った状態を、冷静に淡々と、客観的姿勢でペストが蔓延していく数字とともに記す。狂信的な無謀な行動や無神論者の絶望的な行動についても批判する。

特効薬と称する如何なる薬も、根源的な薬を調合したもので予防か毒消しかとの指摘は鋭く印象に残った。

『弾丸が変える現代の戦い方』

二見龍、照井資規（誠文堂新光社）

新田 雅司

陸自元師団長の二見氏と、元自衛隊員で弾道学に詳しい照井氏の対談。世界のライフルの銃弾は、小型弾から一昔前のサイズに戻りつつある。小型弾の「死の間合い」の外からの長距離射撃を可能にし、小型でない分製造も容易。光学式照準器も標準装備。が、自衛隊がいまだ小型弾を採用していることに警鐘を鳴らす本です。コト弾丸の口径一つで、ここまで戦闘の在り様が実際に変わり、それを語り得るものかと驚きの内容でした。

『風と双眼鏡、膝掛け毛布』

梨木香歩（筑摩書房）

金森　匡子

この本は、地名から想起する世界を描くエッセイ集で、いろいろな地名が登場します。例えば瑞穂町の「箱根ヶ崎」。箱根とは、根は峰を意味し「箱のような山」。有名な箱根の山が箱に見えるか不明ですが、こちらの「箱根ヶ崎」は狭山丘陵の南西の外れで箱に見えそうです。梨木香歩は独特のファンタジー世界が楽しい作家で、以前の旅やまだ知らない土地に思いをはせて、バーチャルな旅を楽しんだ一冊となりました。

『夢見る帝国図書館』

中島京子（文藝春秋社）

中井　あつし

上野の国際子ども図書館はかつて帝国図書館だった。今でもクラシックな内装と階段室は当時のまま残っている。

本書では擬人化された帝国図書館が樋口一葉に恋をしたり、戦時下には動物園での猛獣毒殺を間近に聞いたりもする。

帝国図書館の取材を進めるうちに、「わたし」は図書館の歴史と共に、上野公園と戦争孤児の戦後史も知ることになる。

富国強兵の一環として設立された図書館だが、戦争のたびに戦費優先で金欠に悩む様子が興味深かった。

『われ御身を愛す』

穂積五一・木下明子編（鏡浦書房）

武内　法行

昭和三十二年（一九五七）、伊豆の天城山で、大学生男女の心中事件があつた（「天城心中」と呼ばれる）。その二人の書簡を纏めた本である（既に絶版で中央図書館にもなく、他館から取り寄せてもらつた）。

旧満州国皇帝の姪である愛新覚羅（あいしんかくら）家の令嬢と、同級の大学生との恋愛死といふ事件であり、当時大いにマスコミを騒がせた。

今読むと、二人とも極めて真面目で高い精神的結びつきを目指してゐたが、その生ひ立ちや家柄、血統、係累等の壁により周囲から孤立し、また若さ故の思ひ込みや短慮で死に到つたことが窺はれる。

昭和の一悲劇であらう。読後に尾をひく本である。

『テヘランでロリータを読む』

アーザル・ナフィーシー（白水社）

『戦場から女優へ』

サヘル・ローズ（文藝春秋）

『i（アイ）』

西加奈子（ポプラ文庫）

『敦煌』

井上靖（新潮文庫）

清水　正行

イラン・イラク戦争など他人事のように済ませていたが、これを読んでぐっと身近に感じた。テヘランの大学で文学を教える女性教育者が、空爆や当局の監視の目を盗みながら女生徒らとロシアの反体制作家や欧米の代表作などを自宅に潜みながら学び合う。また、サヘル・ローズは、まさにこの空爆の生き残りで数奇な運命をたどって日本で暮らす。それは『i』の主人公と重なり、『敦煌』を深読みするテレビ番組では王女に扮して井上靖の意図を汲んでいた。一貫して宗教や民族の壁を越えた人間、その生きる尊さを伝えている。

『松本清張 小説コレクション 短篇集Ⅰ』

阿刀田高編集（中央公論社）

猪爪　恵美子

仕事を辞めたこともあり、一年間沢山の本を読んだ。中でも印象に残ったのは阿刀田高編集「松本清張　短篇集」である。

短編であることからストーリーが簡潔だが、時代の猥雑な臭いを感じさせる。戦後ながらの犯罪、必然性のあるトリック、ドンデン返し、納得の結末。面白かった。松本清張がパソコンでデータを拾い防犯カメラを利用して携帯電話を駆使したら、どんな作品を書いたのだろうか？興味が尽きない。

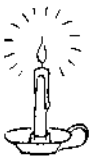
『独ソ戦 絶滅戦争の惨禍』

大木毅（岩波書店）

松本　良一

第二次世界大戦が終結して七五年、なかでもナチズムと共産主義体制の生き残りを賭けての独ソ戦は空前の規模の総力戦となって、人的被害だけでもソ連約二七〇〇万人、ドイツ約八〇〇万人の凄惨なものとなった。今迄戦記等多数出ているが、美化歪曲されたものが多く、著者は公文書や資料等の公開、発掘が進んだ現状で、新しい認識の下に、当時の世界情勢を踏まえて主な会戦が述べられている。

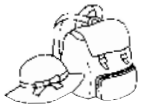
如何なる場合も聖戦など有り得ないと思う。



『47都道府県女ひとりで行ってみよう』

益田ミリ（幻冬舎）

上野 千晴



コロナ禍で一番淋しさを感じた事は、旅行に行けない事だった。計画した旅行を取り止め落ちこんでいた時にこの本に出会った。タイトルが面白かった。

ひと月に一度どこかの県を訪れ巡った著者の、旅エッセイ。掛かった交通費や食事代、拝観料や食べた物（名物と書かないところがこの本のミソ）、買った土産も載っていて参考になる。まるで自分も各地を巡って旅をしている様な気分で、とても楽しく読み進めた。

『勝間式超ロジカル家事』

勝間和代（アチーブメント出版）

涌井 明子

共働きでお子さんもいるのに、家事を99％していると言う友人のすすめで読んでみました。

仕事術のプロである経済評論家の著者が、一年以上をかけて「仕事のスキルを全力投入して家事を超効率化」した内容が書かれています。「　」は抜粋。

勝間さんすごい！

勝間さんありがとう！

この本を読みながら思わず何度もつぶやいてしまいました。

一読の価値あります！

①『文章読本』（中央公論社）②『陰翳礼讃』（中公文庫）

谷崎潤一郎

関 美智子

①は作者の長年の経験から「文章とは何か」「文章の上達法」「文章の要素」の三章から示した読本。②は「美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや」と考え、家屋や暮らしにうす暗さを取り入れた効果を例にとり上げて解説している。今秋谷崎作品を読むにあたり、①、②の本を再度読み返すことによって①では小説を読み解くヒントを、②では日本の美の鑑賞眼を加齢を経て学び、深まった有意義な本です。

『人間臨終図巻』上下二巻

山田風太郎（徳間書店）

松山 実

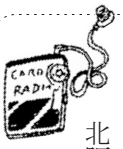
これは、古今東西の歴史上の人間について、その最後を描いた本である。下は十五才から、上は百才以上まで、千名近くの人間が登場する。我々もよく知る者もいるが、これだけの数を集めたのは驚異である。読み進めるうち、若年の死、必ずしも不運不幸とは限らずとの思いを強くする。なぜなら、長寿は必ず病いを伴なうからである。

医療の劇的進歩と超高齢化社会を迎えた今も、人間が悲劇的存在であることに変りはない。

『ラジオドラマ脚本入門』

北阪昌人（映人社）

鍛冶 勝



現在も毎日、放送されているラジオドラマ。ネット全盛の今、ポータブルな音のドラマが輝きをとり戻している。

ラジオドラマは、映像ドラマとちがい、カメラを指定する柱がない等、脚本上の書式が異なる。本書は初学者に配慮した、実践的な入門書。

一部のラジオ局では、毎年、自作のラジオドラマの脚本を一般募集している。受賞作品は、制作、放送されるので、本書で学んだ成果を実地に試せる。

『アナーキスト人類学のための断章』

デヴィッド・グレーバー　高祖岩三郎訳（以文社）

宇佐美 理

今年亡くなったデヴィッド・グレーバーは、政治的腐敗と経済的格差の闇しか見えない今日において、戸惑うほどに明るい可能性を説得力をもって指し示すことのできる数少ない理論家・活動家の一人だった。アナーキズムという思想をプルードンではなくマルセル・モースから導き出そうとする本書での試みは、「ウォール街を占拠せよ」といった社会運動へ至る実践の中から生まれたものとして、今後ますます読まれることだろう。

『亡き人へのレクイエム』

池内紀（みすず書房）

猪原 康一郎

本書は知己のある28人への追悼文が綴られ、亡き人への親しみのある語り口は池内調。最終章で自らの死について語った。「自分の死を死にたい」と。それが究極の自由と。

小四で父、高一で兄、大学を出た頃に母を亡くした。それ故、死に対しては醒めていた。テレビもパソコンも持たず周回遅れの人生を楽しんだ。……そしてその前夜「救急車を呼び病院へ行きましょうか」と促した夫人を制して、静かに二階の寝室に向い、再び起きることは無かった。同時代に生きた仲間である。

ブッククラブから

宇野千代 著『色ざんげ』
―自己体験を重ねる恋愛冒険小説―

大井　利雄

心中事件を起した東郷青児をモデルにして、周囲の女性との自由奔放な恋模様を描いた。パリから帰朝の洋画家湯浅譲二の語りで運ばれるみずみずしい恋愛冒険小説ともいえる。フィクションではなく、宇野千代が、青児から聞きだし、彼女自身の美貌と華麗奔放な男性関係、美への目利きの凄さ、思ったらすぐ行動力に移す天性の自由な生き方が基本にある。

千代と青児は同じ一八九七年生まれ、事件は一九二九年で、同棲生活は取材で訪れた年から三四年まで続く。『色ざんげ』は三三年から三五年にかけて執筆。事件当時尾崎士郎との別れの話も進行していた。

昭和初期の風俗描写の古さの中で、主人公たちは時代を先行した新鮮さをもち現在でも通じする心理ではなかろうか。巴里帰りの社交的でモダンな男性は、通常の女性としては高尾、つゆ子、とも子のごとく憧れの的だったが、妻のまつ代にとっては、待たせておいて憤懣やる方ないだろう。青児に対する親の考えは、両家で倫理観が違う。

平明な言葉で、明るく、次の展開がどうなるかわくわくさせ、行替えもなく、緊張感をもってぐいぐい読ませる筆力は凄い。

心理描写は、自己体験を重ねて、青児からその深層心理を聞きだし紡いだものであろう。

譲二のつゆ子への執念、自宅の監視（今風のストーカー）。小田原から強羅へ嵐の雨中をついて車での別荘訪問は、宇野千代の一途に思い詰めたら突っ走る姿と重なる。

山田詠美の評「この作品に流れているのは、あくまで乾いた通奏低音なのです」〝フランス風の洒落た雰囲気が漂う〟に納得する。

〈私の書いたものの中で一番面白い〉

中央公論社版『色ざんげ』発刊から四十二年を経て、『宇野千代全集』の「あとがき」に、宇野千代は次のように書く。

「青児と五六年の間、一緒に暮していた私は、その話をたまに青児から聞くことがあって、それをもとに、自分流に一つの物語にした。一緒に暮している男の、世にもショッキングな話を小説にしたりした自分のことを、私はいまも考える。またその話を私にしてくれたときの、東郷の気持も考える。若かった頃の、或る時期のこともあったが、いまは、東郷に対して、或る感謝に似た気持ちを抱いているのである。私の書いたものの中で、一番面白い、と言うのが世評であることも、皮肉ではないかと思う」。

〈取材の動機と同棲生活へ〉

『報知新聞』に連載中の「墨粟（けし）はなぜ紅い」（中央公論社、一九三〇発刊）にガス自殺の場面を書きたくて、取材を目的に大森の酒場「白夜」で会う。誘われてそのままタクシーで東郷の家に行き、一晩を過ごし、翌朝、蒲団を畳もうとして、そこにおびただしい血痕と血糊が固まったあとを見出す。それを見ても、怖いとも逃げ出そうとも思わず、そのまま居着いてしまった。

〈聞くことが書くことである〉

東郷青児が亡くなって二年後、「それは刃物が導いた――『色ざんげ』追記（『新潮』昭和五五年九月号）に書いたときの気持ちを次のように記している。

かって作者である「私」は「一言も聞き違へることなく、精神を集中して当らなければならない。私にとっては聞くことが書くことである」と思い、東郷は「俺はこの女によって自分を再現するのだ。俺は話すことによって書くのだ」と思う。文字通り真剣勝負のような「二年間」を経て、「その間に物語は東郷の手から離れて、凡て私の手に移ってゐた。私は自分がこの物語を創作したのでもあったかのやうに錯覚して、夢中で書いた」。

くにたちブッククラブ

―空間を超えて世界と向きあう文学―

小野正嗣『九年前の祈り』
（講談社文庫）

講　師　大野　亮司
（亜細亜大学・日本近代文学）

と　き　1月7日（木）
夜7時半～9時半

定　員　30名
（今年度申込済の方申込不要）

ところ　公民館 地下ホール

申込先　公民館　☎（572）5141

＊今年度のブッククラブは
今回が最終回です。

図書室のつどい

性格とは何か
～より良く生きるための心理学～

お話　小塩（おしお）真司（あつし）（早稲田大学）

「明るい性格」「外交的な性格」「ネガティブな性格」…性格には色々な表現がありますが、みなさんは自分をどんな性格と表しますか？また、その性格を変えたいと思ったことはありますか？

心理学で言う「性格」は信頼性と妥当性を大事にしていて、ビッグ・ファイブと呼ばれる5つの性格特性（外向性、神経症傾向、開放性、協調性、勤勉性）を使った調査結果等をもとに、これまで様々な研究が行われています。年齢とともに人は優しくなる？地域による特性はある？「成功」できる性格とは？社会情勢の影響はある？心理学による様々なデータから小塩さんにお話を伺います。

「性格」について知ることで、今一度自分を見つめ、よりよく生きるヒントを見つけませんか。

〈小塩さんの本〉表題作（中公新書）、「性格がいい人、悪い人の科学」（日経プレミアシリーズ）ほか

とき　1月30日(土)　朝10時～12時
ところ　公民館 地下ホール
定員　40名(当日先着順)
申込先　1月8日(金)朝9時～

＊発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。
また、マスクの着用をお願いします。

〈私の本棚から　第4回〉

朝井リョウ著『死にがいを求めて生きているの』

石井　翔梧

「NO. 1にならなくてもいい　もともと特別なOnly one」平成で一番の売上を記録した楽曲の歌い出しである。「人と競争するよりも、自分らしさを大切にしよう」というメッセージが込められた歌詞に、多くの人が勇気づけられた。この歌詞に象徴されるように、平成時代では、競争や序列化をできるだけなくし、多様性の尊重が目指されてきた。その結果、しょうがいしゃの社会参加が目指され、性的マイノリティの方々に対する社会の理解も進んだ。これらは紛れもなく大切なことだ。

しかし、今日謳われる「個性」「オンリーワン」「自分らしさ」という言葉に支配される〝しんどさ〟もまた存在することを本書は描き出している。競争をなくすことは、自分の価値を相対的に計ることを難しくした。性別や学歴等の社会的な枠組みが、（建前の上では）緩やかになる中で、より生身の〝私〟が問われるようになった。それはすなわち、自分の価値やアイデンティティを自分で見いだし、「私はこんな人間なんです。」と他者に絶えず表現することが必要になったことを意味する。

「多様性尊重時代の中で、自分の価値を探し続けなければならない。」そんな現代人が持つ〝しんどさ〟を具現化した存在こそ、本書の主人公である堀北雄介なのだ。北海道を舞台にした群像劇の中で、様々な登場人物の視点から、雄介の小学生から大学生までの育ちの過程が描かれる。運動会での棒倒し、高校内の学力テスト、ジンパ復活運動、学生自治寮存続運動、様々な活動に雄介はのめり込む。立ち向かう対象を変えながら、「価値ある人間」「やるべき使命を持つ人間」としての自分を周囲に示すことで、自分自身の存在意義を確かめようと苦闘し続ける。「俺は死ぬまでの時間に役割が欲しいだけなんだよ。」と語る雄介は、物語終盤に新たな〝生きがい〟に辿り着く。

作中での雄介の姿を見て、僕は非常に痛々しいと感じる。しかし、この痛々しいという感情は雄介に向けられたものだけではない。雄介を通して見える、過去や現在の自分自身の言動に向けられた自嘲的なものであり、身近な知人の言動に向けられたものでもある。「なんか自分は絶対こうはならないって言い切れない気持ち悪さもあるっていうか。自分の中にもいるんですよ、堀北雄介が。」「自分が雄介でない人間であるとどうして言い切れるのか。」作中の人物のセリフに同意せざるを得ない自分がいる。平成で十番目に売れた曲の中には、「自分らしさの檻」という歌詞が出てくる。〝強迫的に自分を生きている〟部分があるのだ。雄介も、他の登場人物も、誰だってそう、僕だってそうなんだと思う。

（中央公論新社）

公民館図書室 休室のお知らせ

図書館システムの更新及び蔵書点検のため、休室します。ご理解とご協力をお願いします。

休室期間
2月2日（火）～ 2月4日（木）まで

※新聞は、休館日の月曜を除き朝９時から夕方５時までの間２階事務室前で閲覧できます。